



いしずえ

恵那北中学校 学校だより 第258号
発行:令和4年11月28日(月)

◇「いしずえ」の名称は、校歌の一節「学ぶことそれは礎」から生涯学習の基礎を学ぶ生徒達の心と体の成長を願ってつけました。
◇NOは創刊号以来の通番でつけております。

「普通」って何だろう

校長 可知 浩幸

もうすぐ師走を迎えます。今年も岐阜県の人権教育週間「ひびきあい週間」が始まります。恵那北中学校では、12月6日(火)をひびきあいの日とし、道徳の時間にLGBTQ(性的マイノリティ)啓発漫画「りんごの色」(大分県発行)を題材に、性の多様性について学びます。

性の多様性を学ぶということは、「普通」を問い直すことでもあります。私は、保健体育の教員でしたので、「思春期に入ると、自然と異性への関心が高まり…」と、異性を好きになることが前提の保健の授業を行ってきました。それが、教科書に書いてある内容であり、全国どこの中学校でもごく当たり前に指導されてきたことでした。しかし、その当たり前に対して適応しがたい子どもたちが、いじめの対象になったり、不登校となったりすることが、最近「問題」として認識されるようになってきました。

アンコンシャス・バイアスという言葉があります。「固定観念にとらわれた無意識の偏見・思い込み」と訳され、誰にでもあるものです。ちょっと、次のクイズに答えてみてください。

Q. この外科医と患者の関係は？

父親が子どもを乗せて車を運転していたところ、トラックと正面衝突しました。父親は即死、後部座席の少年は意識不明の重体です。少年は救急搬送され、すぐに手術をすることになりました。執刀医は海外でも高名な脳外科医の権威です。ところが、その脳外科医は、少年を見てこう叫びました。

「この患者は私の息子なので、私には手術できない。」

クイズの答えは、「脳外科医は少年の母親だった」です。脳外科医の権威である執刀医と聞いて男性を思い浮かべた方が多かったのではないのでしょうか。(もしかして、ドクターXの大門未知子に発想がとんだ方は、母親だと思いついたかもしれません。)

このアンコンシャス・バイアスがきっかけとなり、私たちは、無意識の「決めつけ」や「押しつけ」により相手を傷つけたり、苦しめたりしていることがあるのです。例えば…

- ・ 「“普通”はそうだ、“たいてい”はこうなる」という価値観の決めつけ
- ・ 「どうせダメ、きっと無理、できるわけない」などの能力の決めつけ
- ・ 「そんなはずはない、こうに決まっている」などの解釈の押しつけ
- ・ 「こうある“べき”だ、こうでないとはだめだ」という理想の押しつけ

などは、子どもと向き合う上で気をつけなければいけないことです。今年のゴールデンウィーク頃にロードショーされていた、2020年本屋大賞を受賞した尻良ゆう著「流浪の月」(創元文芸文庫)という小説があります。この小説のテーマがまさに「アンコンシャス・バイアス」で、解説には次のように書かれています。

「普通」を自任する人々の多くは、優しき、善意や良心、道徳心から「良かれと思って」、自分の目から「普通」ではないと思われる人々に対し、「普通」を突き付ける。それは、刃であり暴力であって、突き付ける側は相手を殺める危険性を秘めていることに気づいていない。

大切なのは、日常に溢れている「アンコンシャス・バイアス」に気づき、多様性を認め、意識して人に優しい行動をすることで、人権意識を高めていくことだと思います。今年のひびきあいの日の活動が、性的マイノリティとされる“誰か”の想いを慮ることのできる学びの多いステキな一日になることを願っています。